



TITLE:

ペッティの『租税論』

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

CITATION:

白杉, 庄一郎. ペッティの『租税論』. 経済論叢 1943, 56(6): 623-639

ISSUE DATE:

1943-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132011>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號六第卷六十五第

月六年八十和昭

論叢

國家と經濟生活……………

文學博士 高田保馬

一九三六年アメリカ商船法……………

經濟學士 佐波宣平

インテレッセンゲマインシャフト
に關する若干の考察……………

經濟學士 靜田均

ペッテイの『租稅論』……………

經濟學士 白杉庄一郎

研究

外地に於ける工業立地條件……………

經濟學士 田杉競

說苑

滿洲經濟見聞記……………

經濟學士 堀江保藏

附錄

彙報

本誌第五十六卷總目錄

ペットティの『租税論』

白 杉 庄 一 郎

本論はウィリアム・ペットティ(William Petty, 1623-87)の經濟思想に關する研究の第一節である。ペットティは従来しばしば近代經濟學の始祖の一人に數へられてきた。その點から見てもペットティの經濟思想は、近代經濟學の超克が問題となりつつある今日とくに、再吟味の價值があるといつてよからう。しかし、それとならんで、私がペットティを取上げる今一つの理由は、近代經濟學の始祖とさへ云はれる彼が根本においてどこまでも重商主義者であり、大英帝國の建設に對する思想的協力者であつたと考へられるがためである。彼はトーマス・マンなどの場合とは異つた段階におけるイギリス重商主義を代表する。したがつて、かつて私がマンの『財寶論』を扱つた際に述べたとき重商主義の再檢討といふことに對する現代的意義が承認されるならば、ペットティの經濟思想はもう一度問題にさるべき價值があるやうに思はれるのである。

ペットティの經濟思想を問題にする場合、まづ取上げなければならないのは『租税論』(A Treatise of Taxes and Contributions, 1662)である。けだし、これが彼の經濟に關する處女作であつたばかりでなく、彼が近代經濟學の始祖とさへ呼ばれるのは、この著作に最も鮮明な形をとつて現れてゐる經濟理論的認識によつてであるからであ

る。しかし彼の經濟理論を取上げる前に、この書の主題たる租税論にうかがはれる彼の經濟思想を見きはめておかねばならぬ。

『租税論』は國家經費の分析をもつて始められてゐる。國家經費は國防費・行政官費・宗教費・教育費・社會事業費・公共土木事業費の六つに分けて考へられる。ついで彼はこれらの經費を増加せしめる原因について述べてゐる。經費膨脹の原因は一般的原因と特殊的原因とに分けて考へられる。まづ特殊の原因は國家經費の各項目に關聯する。

國家經費のうち第一にあげらるべき國防費は、内外における戰爭および戰爭の脅威を増加せしめる原因によつて増加せしめられる。ペッティは書いてゐる。「侵略的な對外戰爭は多くの國家的口實をもつて潤色された種々様々の祕密にして個人的な嫌惡によつて惹起される。それについて我々はただ次のことだけを云ふことができる、特にここイングランドにおいて通常それに驅り立てるものは、我國は人口稠密であるとか、もし我々がより多くの領土を欲するならば、我々はそれをアメリカ人から購入するよりは隣國から廉價に取得しようといふ謬見であり、君主の偉大や榮光は團結かく統治のゆきわたつた人民の數や技術や勤勉よりは、むしろその領土の大きさにあるといひ、さらには地中や海中から自分で收益を收めるよりは他の人々から詐欺や強奪によつて取得する方が名譽であるとする誤謬である。」と。ここには當時のイギリス軍商主義のもつた帝國主義の側面が辛辣に暴露されてゐると見ることが出来る。ただし彼は決して國防を輕視したりなどするものではないのであつて「防衛戰爭は被侵略國の戰爭に對する用意の缺如から起つてくる、……………それゆゑ國內を常に戰爭態勢に置いておくことが外國からの戰爭を遠ざけうる最も廉價な方法である」とも述べてゐる。(チャールズ・ヘンリ・ハル編纂『サ

ちなみに彼は國內戰爭すなはち内亂の原因として宗教以外につきの諸事情をあげてゐるが、そこには王政復古時代の思想家としての彼の面目を髣髴たらしめるものがあるといふ意味において、若干の興味を感じしめる。曰く。「内亂 (Civil Wars) はまた自分たちの不安な状態が普遍的混亂によつて最もよく救済されると夢想する人々によつて惹起される、けれどもかかる無秩序の結果彼等は、たとへ半残つて成功するにたところで、おそらくは一層悪い状態におかれるであらうが、しかし戦闘中に死んでしまふといふ方が一層たしかだといふことは云ふまでもないのである。なほまた政治形式は臣民の富に關して數年のうちに何か著しい變更をもたらずであらうとか、最も古く且つ現存してゐる形式がこの國にとつて最善のものでないとか、一般に承認されてゐる家族もしくは個人が新しい王位要求者より否さらにはなされうる最善の選舉よりよくないとか、主權は目に見えないものであつて、いふまでもなく或る一個人もしくは數人に屬するものでないといふやうに考へる人々によつて惹起される。國民の富 (The Wealth of the Nation) があまりに少數の人々の手中にあつて、すべての人々をして乞食をしだり盗みをしたり兵士になつたりする必要を免れしめる如何なる確實な方法も講じられないといふこともまた内亂の原因である。それにまた、若干の人々に奢侈を許しつつ他の人々を餓死せしめるとか、偶然的にして不確實な動機でもつて恩恵を施したり、確實にして目に見える功績のない人々や黨派に巨額の報酬を與へることなどは、頭のふらふらした大衆の間に怨恨を買ふことがらであつて、彼等大衆は少數の陰謀家の火花が容易に燃え立たすことのできる火口なのである。」(同二—二三頁)

すすんでベッティは行政費・宗教費・教育費の削減について述べてゐる。なかんづく興味のあるのは教育費と

くに大學費の節減に關して述べてゐるところである。大學教育費を節減するためには學生數を縮減しなければならぬ。そのために彼は、たとへば醫科の學生について、死亡率によつて罷病率を推定し且つまた専門家の意見を参照して全國民の必要とする醫師數を決定し、それによつて醫科の學生數を決定する方法を提案してゐる。法科や神學科の學生數も同様に社會の必要によつて決定することができる。いな彼はこの提案を商人數の決定にまで擴張してゐる。

「我國の農作物や製造品や消費や輸入を正しく計算することによつて、どれだけの商人が我國の過剰品と他國の過剰品との交換を營んで行くことができるか、またこの國民の各村落への配給をつかさどり且つその過剰分を持歸るのにどれだけの小賣商人が必要であるかが知られる。これらの理由にもとづいて私はこれらの商人の大部分もまた削減されうると推定する、彼等は嚴密にいへば本來社會から何物をも稼ぎ出すものではなく、たがひに貧者の勞働を賭けあふ賭博者にすぎない、靜脈や動脈として政治體の血液や營養物すなはち農業や製造業の生産物を分配する以外に自らは全く何らの果實をも生まないものである。」(二八頁)

ここに見られるベッティの商人觀は、商業に富の源泉を見た重商主義的見解を完全に脱却せるものといふことができる。しかし諸種の職業の計畫的配分に關する彼の主張は、それが國家權力の發動にまたなければならぬものである以上、重商主義的經濟觀の純化徹底と見られなければならないであらう。ハルのごときは、「經濟學上の著述家としてベッティは本質的にはマーカンテイリストといふよりはむしろカメラリストである」としてゐるが(前掲、解説六十九頁)、彼のいはゆるカメラリストの何であるかは明瞭でないとしても、私はベッティの思想はドイツ流のカメラリストの範疇をもつて特色づけらるべきではなくて、マーカンテイリズムの純化徹底といつ

た性格のものであると考へたい。その意味で彼の立場は決して軍商主義を脱却せるものとはいへないのである。しかしながら、同時に、たとへば彼が精神的勞働者や商人の縮減の必要を感じたについては、それらの職業の生産性に關する觀念がその根據となつてゐたと見るべきであつて、その側面から見ればアダム・スミスに至つて開花する自由主義的職業觀の萌芽が発見されるのである。すなはち彼はかういつてゐる、「政府や法律や教會に關係をもつ多數の官職や知行が減少せしめられるならば、そしてもし僧侶や法律家や醫者や商人や小賣商人の人数が——彼等はすべて社會のために僅かの仕事をして多くの賃銀を受取るのであるが——減少せしめられるならば、共同經費の支辨はいかほど容易となり、その割當はいかほど平等となるであらう。」と(二八—二九頁)。

最後に、軍事費・行政費・宗教費・教育費は削減さるべしと考へたペッティは、社會事業費と土木事業費については反對に増額さるべしと主張してゐる。彼は貧者の救済を當然視するばかりでなく、さらにすすんで社會事業費は必ずしも國家に損失を與へるものでないとして『政治算術論』(Political Arithmetic, 1690)にかう云つてゐる。「乞食や詐欺や窃盜や賭博や返済の意圖なき借金によつて生活し、それによつて瞞されやすい不注意な人々から身分不相應の生活資料を得てゐる人々、かかる人々に對して國家は現在のところ使役方法をもたず、したがつてその全生活費を負擔しなければならないのであるが、しかし總てかかる人々に對しては公の租税によつて一定の合法的な給與を與へる方が、彼等をしてただ不注意な瞞され易い本性の善良な人々の負擔によつて贅澤をさせ且つ國家をして風規の悪いことから起つてくる犯罪のために生命を奪はれる多くの有能な人々を喪失せしめるよりは、公共の利益であらう。」と(第二章)。(註)

貧民救助の必要はまた、産業發達の必要とならんで、公共土木事業費の増額を必要ならしめる。

(註) 同様の思想は、ベッティが手を加へたと云はれてゐるジョン・グラントの『死亡表に關する自然的ならびに政治的觀察』(Natural and Political Observations upon the Bills of Mortality, 1662) にも現れてゐる。すなはち、そこでも衣食はすべてこれを公費で扶持する方が、たとへ一文の稼ぎをしないでも、彼等を街々を彷徨乞食せしめるよりまさつてゐるとされてゐる。(第三章)。

二

以上我々はベッティが國家經費膨脹の特殊的原因とそれが削減の方法について述べてゐるところから我々に興味のある部分を抜き出したのであるが、つぎに經費膨脹の一般的原因としてゐるものについて見てみよう。經費膨脹の一般的原因といふのは徴税上の原因であつて、彼は人民の納税忌避・金納の強制・課税權の不明確・徴税技術の缺陷が徴税費を増加せしめるといふのである。

まづ人民の納税忌避に關聯して、彼は、主權者は必要以上の租税を要求すべからずとして云ふ。「もし主權者が確實に欲するところを然るべき時期に獲得しうるならば、産業によつてそれを増加せしめる臣民の手から貨幣を取上げ、それを自分の金庫の中に藏つておくのは彼自身の大損害である。金庫の中の金は彼自身にとつて全然役に立たないのみならず、せがまれたり浪費されたりしがちなものである。」と(三二頁)。しかし彼は租税をもつて初めから有害なものと考えたのではない。その一つの理由は彼は富を比例において考へたためである。或る個所で彼は云つてゐる。「もし萬人が苦むならば、何人も苦みはしない。もし總ての人々がその財産の半分を失つたところで、彼等は現在より貧しくなりはしないであらう。また財産が二倍になつたところで、彼等は少しも富裕になりはしないであらう。富の形相因(Ratio formatae of Riches)は分量よりはむしろ比例にあるのである。」

と(二六頁)。そしてこの兄地から租税の富に對する影響についていふ。「租税がさう重くなかつたならば、そしてそれが萬人に對して平衡を保つてゐるならば、何人もそれによつて損害を蒙り富を失ふことがないであらう。けだし總ての人々の財産が半分になつたり二倍になつたりしたところで、どちらの場合にも人々の富には變りがないであらう。けだしその財産は各人をして以前の狀態や體面や身分を保持せしめるであらうからである。」と(三二頁)。ペッティが租税をもつて必ずしも有害なものとなさなかつた今一つの理由は、經濟の循環的性格に氣づいてゐたからである。曰く。

「なほまた、課徴された貨幣が國外へ出て行かないならば、國民は他の如何なる國民と比較してもやはり以前と同様富裕であらう。ただ君主と人民との富が暫くの間すなはち誰かから課徴された貨幣が再びそれを支拂つた同一人または他の人々に拂戻されるまで異なるにすぎない。そしてそれが拂戻された場合には、各人は新しい分配によつて同様に利益を得たり損失を招いたりする機會をもつであらう、言ひ換へると各人は或る機會に損失を招くにしても他の機會に利得するであらう。

「人々は課徴された貨幣が宴會や豪華な催し物や凱旋門などに費されるであらうと考へる場合には、大いに不平をいふ。それに對して私は答へる、それこそは課徴された貨幣のそれらの事物のために仕事する人々への拂戻しである。それらの仕事は浪費であり裝飾的なもののやうに見えるけれども、やがては最も有用な人々すなはち醸造業者やパン屋や仕立屋や靴屋などへ戻つてくるのである。

「人民はしばしば國王が人民から課徴する貨幣を寵臣に與へると苦情をいふ。それに對して私は答へる、寵臣に與へられるものは次いでは或は廻り廻つて我々自身の手に入るか、もしくは我々が好意をもちそれに値すると

考へる人々の手に歸しうるのである、と。』(三三頁)

右のごとき租税の循環的性情と關聯するが、ベッティは第三に、租税がもし國產品に費されるならば、特定の人々の富や財産に變化をもたらしはするが、富や財産は土地をもつた遊惰な人々から職業をもつた勤勉な人々へ移轉することによつて、人民全體に對し殆んど害を與へないやうに思はれると主張する。『政治算術論』においては、彼はさらに進んで、或る種の租税および公課は王國の富を減少せしめるよりはむしろ増加せしめるとして次のごとく述べてゐる。

「租税によつて人民から徴收される貨幣その他の動産が破壊され全滅されるならば、あきらかに、かかる公課は共同の富(Communwealth)を減少せしめるであらう。またもしそれらの貨幣や動産が何の對價も獲得せず外國に輸出されるならば、その結果は右と同じであるか或は一層悪いであらう。しかし前述のごとくに徴收されるものが或る人から他の人に移轉されるにすぎないならば、我々はただその貨幣または財が改良家の手から奪はれて惡管理者に與へられるかどうか或はその反對であるかどうかを考慮すればよい。たとへば、貨幣が租税によつて餘計な飲食にそれを費す人々から取上げられて、土地の改良や漁業や鑛山の採掘や製造業などにそれを使用する他の人に引渡されると假定するならば、あきらかに、かかる租税は右にあげた人々の屬する國家にとつて利益である。いな、もし貨幣が右に述べたごとく飲食もしくは何かその他の消耗品に費す人から取上げて、衣服に投ずる人に移轉されるにしても、國家はなほ多少の利益をうると私は思ふ。なんとなれば衣服は飲食物のごとく直ちに消耗してしまふものではないからである。しかしもしそれが家具に費されるならば利益は、もう少し多い。家屋の建築ならばさらに多く、土地の改良や鑛山の採掘や漁業などならば一層多い。しかし最も多いのは金や銀の搬

入にあてられる場合である。なんとすれば、これらの物は消耗品ではなく、いどこでも富として尊重されるからである。ところが、他の消耗品すなはちその價值が流行に依存したり場合によつて稀少であつたり豊富であつたりするものは、富ではあるが、その時、その場所での富にすぎない。

「もし、自分の住んでゐる國を華美な食物や衣服や家具や住居や立派な庭園や果樹園や公共の建造物などで飾るばかりでなく貿易と武力によつてその國の金や銀や寶石を増加させつつある勤勉にして創意に富んだ人々の資本が、實際かういふ人々の資本が租税によつて減少せしめられ、飲食や歌舞音曲をこととする人々いながら、上學その他の無用の思辨にふけつたり物質的なもの即ち國家にとつて眞實の效用や價值をもつた物を生産しない何かその他の方面に従事する人々に移轉されるならば、公共の富は減少せしめられるであらう。」（『政治算術論』第二章）

ここに見られる富としての金銀に對する重商主義的讚美については、なほ後に觸れるはずである。ペッティは右のごとき不生産的消費に對する租税のほか、從來十分の仕事をもつてゐない人々に對して租税として外國からの輸入品に加工せしめたり、また既に述べたごとく乞食や無賴の徒を扶養するために課税するがごときも國家の富に影響ないとしてゐるが、最も力説してゐるのは不生産的消費に對する課税である。彼は、收入ではなくて支出に應じて課税し、支出のうちでも耐久的なものに對する支出は比較的寛大に扱ひ、特に利潤の見込のない無用なものに對する支出を重課し、二十四時間内に消滅してしまふやうなものに對する過大な支出の抑制に努めるものとして、オランダの課税方法を推奨してゐる（註二）。オランダほど多額の租税を支拂つてゐるにもかかはらず富を増加した國民はないといふのである。ちなみに、オランダの輸出入關稅は一般に低い、それが徴收されるのは場合によつては隣國の輸入禁止や高率關稅に對抗するためであるが、一般的には貿易狀況の記録を得るためにす

ぎないとしてゐるのは、自由貿易への志向の一つとも見られて注意すべき點であらう。それはともかく、以上の議論を通じ我々はベッティにおいて擡頭期の生産的市民階級の不生産的貴族階級に對する批判的態度が漸くその鋭い表現を得てきつつあるのを認め得るであらう。(註二)

(註一) ベッティは『租税論』において消費税を根據づけて述べてゐる。「すべての人々はただ彼等が公共の平和に對してもつ分前と利益に應じて即ち彼等の財産と富とに應じてのみ公共の經費に貢獻すべきであるといふことは、萬人の一般に承認するところである。ところで二種の富がある、一つは現實的な富であり、いま一つは潜在的な富である。人間は彼が食つたり飲んだり着たり或はその他の方法で眞實かつ眞實に享受するところに應じて眞實かつ眞實に富裕である。ありあまるほどの力をもつてゐるけれども、ほとんどそれを使用しない他の人々の富は潜在的もしくは想像的ではない。これらの人々は自分のための所有者といふよりはむしろ他の人々に對する世話方であり兩替屋である。したがつて、各人は自己のものとして受取り眞實に享受するところに應じて貢納すべきであるといふことが結論できる。」(九一頁)。この見地からさらにすすんで消費税の推奨するべき理由をあげていふ。第一、各人が眞實に享受するところに應じて支拂ふこの租税は、何人に對しても殆んど強制するところがなく、自然的必需品に満足する人々にとつては極めて輕微である。第二に、この租税は、請負制としないで規則正しく徴收されるならば、國民を富裕ならしめる唯一の道たる節儉を獎勵する。第三に、何人も同じ物に對して二度も三度も支拂ふといふことがなくなる、何物も一度しか消費されえないからである。第四、この方法によればつねに國民の富や力を立派に計算することができる(九四―九五頁)。資本の原始的蓄積が強行されねばならなかつた近代市民社會の成立期においてはこのやうに消費税が最も合理的なものと考へられたのであるが、市民社會が封建的專制的な舊制度に對して進歩性をもつたかぎりにおいて、この種の見解も歴史的眞理性をもつてゐたのである。

(註二) グラントの『觀察』の中にも次のごとく不生産的消費者に對する批判的見解が表明されてゐる。曰く、「政策および眞の政治學 (the Art of Governing and the true Politics) の目的は如何にして臣民を平和と豊富のうちに保つかにあるにもかかはらず、人々はそのうちの如何にして互に他の者を排擠し凌駕するか又いかにして公明正大な競争によつてではなくて互の足をすくふことによつて獲物を射止めるかを教へる部分だけを研究してゐる。ところで、この眞實で無害な政策 (policy) の基礎もしくは本領は、土地と領土内の人手とをそれらのあらゆる内在的ならびに偶然的差異に應じて統治するために理解するこ

とである。たとへば、王國のすべての土地の面積や地形や位置を特にその國の最も自然的な永久的にして顯著な境界にしたがつて知るのは有益であらう。……性別・身分別・年齢別・宗教別・職業別・階級または等級別等の人口を知ることの必要もまた決して右に劣らない。すなはち、その知識によつて商業や政治はより安定にまたより規則的にされうであらう。なぜなら、もし我々が上述のごとき人口を知つてゐたとすれば、我々は彼等によつてなされるであらう消費を知ることができ、したがつて商業をその不可能なところに期待するがごときことはありえないであらうからである。しかのみならず、もしこれらのことがらが明瞭かつ眞實に知られたならば、私はそれを單に推測したにすぎないのであるが、かういふことが明かになるであらう、すなはち、人民のうちの如何に僅かの部分が必要な労働や職業に従事してゐるか、換言すれば、如何に多數の婦女子が他の者の所得を消費することしか知らないで全く無爲の生活をしてゐるか、如何に多數の者が單なる奢侈淫樂の徒であり云はば商業による賭博師にすぎないか、如何に多數の者が神學や哲學上の不可解な觀念で憐れな民衆を迷はすことによつて生活してゐるか、如何に多數の者が輕信・過敏および好訟の徒に自分の身體もしくは財産が不調であり危險状態にあると信じこますことによつて生活してゐるか、如何に多數の者が罪惡の幫助によつて生活してゐるか、如何に多數の者が單なる快樂または裝飾品の賣買によつて生活してゐるかまた如何に多數の者が他人にのらくらと給仕することなどによつて生活してゐるか、そして他面においては如何に少數の者が必要な衣食住の生産および加工に使用されてゐるか、また學者のうちでは如何に少數の者が自然と事物との研究を行つてゐるか、彼等のうちの比較的發明な者もそれらについては機智的に書いたり語つたりする以上に多くを田でないのが現状なのである。」(結論)

ミスに至つて完成するこの種の不生産的消費觀は資本主義經濟の成立期には否定しがたい眞理性をもつてゐた。と同時に我々はそれがまた市民階級の立場にふさはしい偏狹な一面觀に墮せるものであることを忘れてはならないであらう。しかし、それにしてもペッティが國家の生産力を發展せしめることを念願とし經濟的計算の必要を強調して次のごとく述べてゐるところには、今日なほ生々として我々に多大の示唆を投げかけるものがある。と云はなければならぬ。ペッティは書いてゐる。

「それゆゑ概していへば、或る租税の得失いかんを知るためには、人民とその職業の狀態(すなはち)人民のうち

如何なる部分が幼弱または不具のため勞働に不適當であるか、また如何なる部分が富や職能や地位の關係から或は勞働や工藝に従事する人々を支配したり指揮したり監督したりする以外の義務や職業をもつてゐる關係から勞働を免除されるかがよく知らなければならない。

「つぎに、上述のごとき勞働や工藝に適する人々のうちどれほどの部分が國民の仕事を現在の狀態と規模において遂行しうるかが計算されねばならぬ。

「残つた人々が外國からの輸入品の全部またはどれくらいを、特にそのうちの何をどれくらい作りうるかどうかを考慮されねばならぬ。この種の人民の残りが（もしいくらでもあるならば）國家に積極的な害惡を與へることなく安全に快樂や裝飾のための工藝や活動に使用されうる。そのうち最も重要なのは自然的知識の改善である。」

（同上）

ここでは國民經濟が計畫的統一體として存在すべきものと想念されてゐると云つてよからう。少くともそれは自由主義の國民經濟觀とはその本質の大いに異つたものと云はなければならぬ。それだけに今日の段階に一層近いものをもつてゐると云ふこともできる。しかしそれは重商主義を否定的に脱却することによつて得られた想念ではなくて、重商主義的經濟觀の純化徹底とも考へらるべきものであることは既に一言したごとくである。計畫の主體が究極的には專制君主であつたばかりではない。文化的活動を一般に輕視して、僅かに實用的な自然科学だけを尊重せるごとき中世に對する反動としての近代の思惟形式の端的な表現といはなければならぬ。しかし歴史的に見れば、當時としては、何よりも重要な生産力を發展せしめるために、それもまた餘儀なき時代的課題であつたといへぬではない。國民生産力の發展、それがベッティの中心的念願であつたと云つてもよい。そし

て國民の富の原因としての生産力に目をつけてゐたところに、彼が重商主義を越えて一段高き見地に立つてゐたといはるべき所以があるのでなければならぬ(註)。

(註) ペツティもまた勞働の生産性に對する分業の利益を認識してゐた。曰く「一人が梳き一人が紡ぎ一人が織り一人が染め一人が仕上げ一人が熨斗をかけて荷造りする場合には、これらの作業が同一人によつて不器用に行はれる場合よりも、織物は廉價に作られるに相違ない」と(經濟學論文集、二六〇頁)。また曰く「製造業によつて得られる利得は、製造業そのものが大でありすぐれてゐるに相違ない」と(同上)。また曰く「製造業によつて得られる利得は、製造業がたがひを生みあひ、そして各製造業はできるだけ多くの部分に分たれ、それによつて各職人の仕事は簡單かつ容易となるであらう。たとへば、懷中時計の製造において、もし一人の人が商車を作り、一人が發條を作り、一人が文字板を鋳り、いま一人がケースを作るならば、全部の仕事が或る一人にまかされる場合よりも時計は立派にして廉價であらう。そして我々はまた、すべての住民がほとんど一業に従事してゐる都會や大都會の市街においては、それらの場所に特有の商品が他の場所よりも立派かつ廉價に作られるのを見るのである。」(四七三頁)

三

以上我々はペツティが經費膨脹の一般的原因の第一としてあげてゐる人民の納税忌避といふ點に關聯せしめて彼の租稅論をまとめて見たのであるが、第二にペツティは租稅の支拂を最も便宜な時節に商品をもつてしないで一定の時期に貨幣をもつて支拂ふことを強制することが租稅を加重せしめてゐるとなし、租稅の金納制に對し批判的な意見を吐露してゐる(三四—三五頁)。現物租稅の推獎は『政治算術論』にも見られるのであつて、そこで彼はアイルランドでは亞麻、イングランドでは亞麻およびその製造品、スコットランドでは鮭をもつて徵稅すべしと提案してゐる(第二章)。これらの思想もまた一面において重商主義に對する批判的な態度を示してゐると見る

こともできるであらう。しかし、その反面において、貨幣經濟の進展といふ當時の歴史的發展の方向から見ればこの主張はむしろ反動的といへぬではなからう。しかし彼の思想の本質的な部分についていへば、それは決して軍商主義の反動といった性質をもつたものでないことは後に詳しく述べるごとくである。

第三の課税權については大した問題はない。第四の課税技術の缺陷としてベッティの重視してゐるのは、人民の富や職業および人口に關する知識の缺如である。すなはち、人民の富や職業および人口がわからなければ、人民の負擔能力がわからないといふのである。そして様々の租税や貢納について論じた『租税論』は第四の問題にかかはらしめて理解することもできる。ここではただ軍商主義に對するベッティの批判的な思想を見るために、軍商主義政策と離すべからざる關係にある關税に關する議論を取上げて見よう。

まづ關税とは何であるか。「初め關税は國內および國外における貨物の運送を掠奪者に對し保護することに對し君主に提供された報酬であつたと私は考へる。そして君主がその種の損失を償ふ義務をもつとすれば、これはもつともなことだと私は信ずる」と述べてゐるところを見ると、關税の本質を一種の保險料と考へるといふのが彼の本意ではなかつたかと推測される。事實、かれは關税を保險料の性質に近づくまで切下げるやう提案してゐるのである(五四・五七頁)。しかし彼は或る種の輸出税は、保險料といった意味においてでなく、主權者は國內生産物に對して當然一定の分前を取得しうるものとしてこれを是認してゐる。したがつて關税の本質については不明瞭なものを殘してゐると云はなければならない。しかし關税の度合についてはかなり詳しく次のごとく述べてゐる。すなはち、輸出税の限度は、輸出者に合理的な利潤を與へた上、外國人をして彼等の必要とするものを他國から輸入するよりは幾分廉價に取得せしめるがときものでなければならぬ。軍税は輸入の禁絶、密輸入脱税

を誘起しやすいものであることに注意しなければならぬ。輸入税についていへば、消費財は同種の國産品より幾分高く課税してよい。奢侈や罪惡に導く傾向のある一切の贅物は奢侈制限令に代つてその使用の抑制に資するほどの税を課してよからう。しかしこの場合にも密輸入に導くことのないやう注意しなければならぬ。反對に、一切の未完製品たとへば生皮や羊毛や生絲や棉花あるひは一切の製造業用の道具や原料は寛大に取扱はるべきである(五五—五六頁)。進んでペッティは當時の關稅制度の缺陷として未完製品に對する課税・徵稅吏の過剩・密輸入の容易をあげ、その對策として噸税と關稅の輕減を提案してゐる。關稅の引下は海上や敵國の危險に對する保險料の性質をもつたものたらしむべしといふのであるが、そこには關稅から收入目的を廢除しようとする意圖が包藏されてゐると見ることが出来る。そしてこれは關稅を重要な財源とした專制君主にとつて革命的な市民的要求といへないではない。しかし重商主義政策に對するペッティの二層批判的な態度が鮮明に浮び出てゐるのは、關稅政策に關聯して論及されてゐる貿易政策においてである。たとへば彼は羊毛の輸出禁止問題を取上げ次のごとく論じてゐる。

「オランダ人は一層多くの技術をもつて仕事をなし一層激しく働いて日を送り運賃や關稅や保險料を一層安くすることが出来るやうになつたがために我國の製造業を壓倒し、ここイングラントの我々を狂暴ならしめ、その結果、我々はともすれば羊毛や粘土の輸出を禁止するといふやうな途方もない亂暴な方法を考へつくといふやうなことになるつてきた。しかしこのやうな方法はおそらく我々にこの貿易の喪失の二倍にもおよぶ損害をもたらすであらう。

「我々はしばしば外國から穀物を買ふことを餘儀なくされる、また同様にしばしば我々は困つたことに國內に

多くの遊び手をもつてゐるが、しかも我々は我國の少數の働き手が羊毛製品をさへ販賣することができないと不平をいふ。この場合、我國の牧羊業を縮少し、一層多くの人手を耕作に振向けた方がよくはないであらうか。なんとすれば、(1)肉が高くなるから、從來は存在しないやうな魚に對する獎勵が起るであらう。(2)我國の貨幣はそれほど速かに穀物に向ふことがなくなるであらう。(3)我々はかかる羊毛の供給過剰をもたなくなるであらう。(4)我國の遊び手は耕作と農業に使用され、牧畜によつて一人の人が云はば數千エーカーの土地を自分自身とその犬によつて耕すといふやうなことがなくなるであらう。

「かりにオランダ人が一層多くの技術によつて我々を凌駕するならば、その最良の職人の多數を引入れるか、我國の最も器用な人々をそこへ送つて習得させるかする方がよくはないであらうか。もし彼等が首尾よく習得するならば、その方がこの上なく周章狼敗して自然に逆ひ風や波を抑止めようなどと努めるよりは遙かに自然の方法であることは極めて明白である。

「もし我々がオランダよりは當地において食物をはるか廉價ならしめ、煩瑣にして舊廢した課税や官職を廢止することができるとすれば、それでさへ水をして自然の噴出力以上に奔出せしめるよりはよいと私は考へる(五九一六〇頁)。

原料の輸出禁止といふやうな方策によつて先進技術をもつた國に對抗しようとした軍商主義の行き方に對して何よりもまづ自國の産業編成を反省することの必要を強調し、先進技術の輸入を提唱してゐるところには注目し値するものがあるといつてよからう。貿易政策の批判に自然法思想を持出し、「賢明な醫者はその患者に餘計な手出しをしないで、激烈な施藥により自然の運動に逆ふよりは、むしろ自然の運動を観察しこれに順應するものであるが、政治學や經濟學(Politics and Economics)においても同じ方法が用ひられなければならない」などと云

つてゐる點も看過しがたい(六〇頁)。他の個所では、自然法に反した人定法を作るのは無駄にして効果のないことだとも云つてゐる(四八頁)。しかしながら、ペッティの思想はまだ自由貿易といふところまでは進んでゐない。輸入禁止の問題についても、輸入が輸出を大いに超過するまではその必要がないといひ「もし我々が放蕩に導く葡萄酒に對して必需品たる良質の毛織物を與へることは苦しいことだと考へるにしても、しかし我々がもし我國の毛織物を他國に賣捌きえないならば、それを作ることを止めるよりは、葡萄酒もしくはそれ以下のものに對してそれを與へる方がよいであらう、いな千人の人々をして失業によりその勞働能力を失はしめるよりは、その千人の勞働の所産を一時焼いてしまつた方がよいであらう」とさへ極言してゐる(六〇頁)。しかし彼はまだ貿易差額主義を脱却するところまでは行つてゐないのである。自由港のごときも、自己自身のためにのみ貿易する國民すなはち自國の餘剩品を賣却して自國の必需品のみを輸入する國民においては無用であるばかりでなく却つて有害であると主張し、ただ中繼貿易の場合においては未完製品に對する課税は不都合であると云つてゐるにすぎない(六〇—六一頁)。

以上我々は租税論を中心としてペッティの經濟思想を跡づけてきたのであるが、それによつて我々は彼が一面において重商主義に對し相當批判的な思想を抱懷してはゐたが、しかも他面なほ重商主義的思想を残してをり、それを完全に脱却してゐないばかりでなく、かへつてそれを純化徹底してゐると見らるべき傾向を示さへしてゐることを知つた。しかし彼が重商主義に對する批判的な思想家として問題にされる場合、注目の對象となつてゐるのは主として經濟現象の本質に迫つて行かうとする彼の態度である。事實、重商主義に對する彼の批判的な態度は富の眞實の源泉を發見しようとする努力において最も明瞭な形をとつて現はれてゐるのである。私は稿を改めて彼の經濟理論が重商主義思想に對してもつ意義を検討してみたいと思ふ。